

鹿角地方のやきもの

藤原 茂

これまで鹿角地方の窯業の事実を知る文献資料がほとんどなく、その実態を把握することができずにいたが、ある端緒から「毛馬内焼」「大湯焼」「鹿角焼」という三種のやきものを確認する機会を得たので、ここに紹介したい。

〈毛馬内焼〉

毛馬内焼は、大正10年(1921)頃毛馬内の高橋七郎兵衛が、函館から陶工を招き、瀬田石沢の土が壁土や小坂人形の素材として使われているのに着目したのがその起源のようである。いろいろ試作の結果、良い成績が得られず、当時小坂鉱山の熔鉱炉用の煉瓦を製作するのに用いられていた、岩手県二戸郡兄畑から産出する陶土でもっぱら焼成したということである。

毛馬内焼の初見は、昭和51(1976)年3月に内藤ヤス氏所有のもので、鉢と盃であったがいずれも乳白色を帯び、呉須でこの地方の風物が軽快なタッチで描かれており、「秋田」「毛馬内」などの刻印が押されていた。

なお内藤家には伝来の菓子皿があるが、その底部に次のような記銘がある。「北海道産ノ石ヲ以テ 五稜郭ニ於テ 丹山造」この菓子皿の作風が毛馬内焼に濃厚に反映しているのを、直感的に受けとることができた。

高橋七郎兵衛の子息(平治)の夫人である高橋タカ氏の談によれば、毛馬内焼の陶工は70がらみの老人で妻を同伴して来たという。高橋家の裏手が窯場だったそうであるが、昭和3(1928)年に昭和館という劇場を建てることになって廃窯となったとのこと。高橋家所有のものは、花入・花瓶・線香立・徳利・盃などで、さきにもた内藤家のものと全く同じ手のものであった。「雲山」という刻印のあるところから、はじめて陶工の名を知ることができた。諏訪富多氏によれば、この陶工は京焼で知られる丹山青海の四男で、諸所放浪のすえこの地に来遊した人だったと証言してくれた。やっと謎が解けたのである。雲山のこれらの作品は、きわめて趣味的なもので、毛馬内を中心とする地主階層の人々の手を経て、この界限に普及したものであった。

〈大湯焼〉

昭和3(1928)年に、諏訪富多氏が雲山を大湯に呼び、川原の湯に窯を創設したのが大湯焼のはじまりで、当時、小坂鉱山で熔鉱炉の建設にたずさわっていた菊地某が、窯の構築にあたった。しかし、雲山がいくばくもなく他所へ立去ったために、錦木の森大森仁助、それに県工業試験場の鈴木成夫技師の紹介で、平鹿の増田窯にいた佐藤吉助(若いころ山形の平清水窯で働いていた)が陶工として参加した。

陶土は、大湯折戸・二戸兄畑などのものを使用し、釉は京都陶料(KK)からとりよせ、燃料は阿仁産の無煙炭をもってあてた。とくに兄畑からは僅少のカオリンが出るので、磁器の焼成を目指したが大量製作するまでにいたらなかった。現に湯呑茶碗や摘入れ(?)などが残っていて、それらのものを見ると焼成が低火度のもので、しかもデザインもどちらかというと必ずしも洗練されてはいない。高台部分に「大湯」または「大湯焼」の銘があって判別が容易である。

このころ、現在の国鉄花輪線(旧秋田鉄道)が好摩～大館間全通し、また毛馬内～和井内間のバス路線の開通とともに、十和田湖の観光に訪れる人々を顧客として販路がひらけたという。結局、大湯焼は昭和10(1935)年8月に襲った大湯川の洪水によって閉窯の運命に見舞われてしまった。

諏訪氏は、大湯温泉開発や大清水開拓に努力し、ストーン・サークル発見の導火線をひらき、鳴子から小松五平を家族ともども移住させて「大湯五平こけし」の制作を援助している。この大湯焼にしても、この地方の産業振興を図る一環としてとりかかったことだったにちがいないが、人為的なはたらきかけにもかかわらず、天災によって窯の煙が途絶えてしまった。

〈鹿角焼〉

鹿角陶器株式会社は、昭和22(1947)年4月、花輪の上旭町に資本金18万円余で設立された。社長は浅利佐助氏、専務吉田秀夫氏、常務相川善一郎氏といったスタッフであった。陶工には相川氏の奔走で、岐阜の笹原窯で水野一善に師事修業していた福田光山(当時40才代)氏を招致した。手足早にもすでに昭和21(1946)年秋には窯が出来上っていたと助手をしていた川口力三氏の話であった。窯はトロコ鉱山や小坂鉱山から耐火煉瓦をゆずり受け、大小の倒煙式角窯をひとつづつ完成したという、1,200°～1,300°の高熱に耐え得るように吟味された。

陶土は当初、岩手兄畑、大湯折戸、曙松館、花輪花軒田のものを実験してみたが、期待したようには仕上がらず、名古屋の伊勢久や岐阜の土岐津産のものを使用し、手まわしろくろだったのをのちに電動モーターに切替えた。燃料は営林署の斡旋で、仙北地方の赤松を大量に購入し焼成するのに充てた。器形は湯呑・灰皿・壺・徳利・急須・盃・水指・香炉・花器・火鉢など各種にわたり多彩をきわめた。釉はブナ皮の木灰に長石の粉や石灰を混合したものを工夫し用いている。注文は東北各地からあったが、秋田の木内、盛岡の川徳両デパートのほか、東京の松坂屋や銀座の白牡丹という美術店とも取引があった。

ここで注目すべきことは、さきの毛馬内焼、大湯焼がいわば民芸陶器であるのに対して、鹿角焼は陶器より硬い「半磁器」であったことと、絵付も福田・相川両氏のほかに、当地出身の奈良裕功・高杉洋介両画伯が担当し、本格的な逸品制作としての陶芸品であったというところにある。「光山」「かづの焼」「鹿角窯」といった刻印や銘が入っていて、それとなく識別できる。

しかし、福田氏の陶工としての意欲的な芸術性追求の姿勢が、あまりにも高位な方向へ進展していったのと、太平洋戦争直後の経済変動の波をうまく乗切れずに、昭和24(1949)年に廃業解散した。いまにして思えば、操業時期がもう10年後だったならば、あるいは永続して今日に及んでいたかも知れない。

以上、鹿角地方のやきものについて、それぞれの顛末を述べたのであるが、いずれも諸般の事情で永続することが困難であったことの特徴的なものとして共通している点は、この地で陶器の焼成にあたって、高火度に耐え得る良質な陶土にめぐまれず、いずれの窯においてもゆきつくところは、陶土を岐阜や愛知などの他県から購求して使用したところにあった。これに加えて、陶器の制作の中心となるリーダー格の陶工が、いつの場合でも他所からはやって来ても、地元の陶工がなかなか育ちにくいという弱さを持っていた。

ともかくも、窯業といえども社会経済の動きや生活文化の指向に支配されるものであることからまぬがれ得ないといってよいであろう。今後もお、県内のこれまであまり知られていない窯業の事実を探ぐり出して、照明をあてて考究につとめたいと思う。

この研究調査にあたり、すでに文中に登場している方々以外に、次の諸氏のご協力に感謝したい。

内藤発二氏(十和田図書館長)

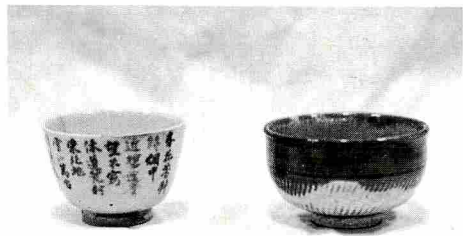
関 順一氏(花輪図書館長)

柳沢兌衛氏(鹿角市教育委員会社会教育課文化財係長)

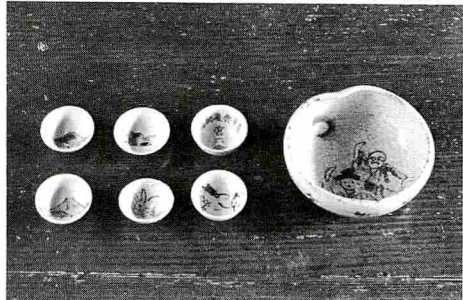
<1977・1・26>



鹿角焼「四耳牡丹唐草花瓶」兎澤八重子氏蔵



大湯焼「湯呑茶碗」本館蔵(諏訪富多氏寄贈)



毛馬内焼「盃・小鉢」内藤ヤス氏蔵